

19. ^{201}Tl の集積した副腎褐色細胞腫の 1 症例

島田受理夫 中俣 政敬 島袋 国定
 城野 和雄 宮路 紀昭 坂田 博道
 篠原 慎治 (鹿大・放)

^{201}Tl は腫瘍親和性スキャン剤として甲状腺、副甲状腺、肺などに用いられているが、今回われわれは、現在まで報告をみない副腎褐色細胞腫への ^{201}Tl 集積例を経験したので報告した。

症例は 59 歳男性で、発作性高血圧と動悸を主訴とし、血中、尿中カテコールアミンが異常高値を示し、褐色細胞腫と診断された。部位診断のため施行した副腎皮質シンチグラフィにて右副腎の完全欠損が認められ、右副腎の腫瘍が疑われたので ^{201}Tl 静注直後よりシンチグラフィを施行したところ、右副腎部に rim-like activity が認められ、これは静注直後像で最も強く、経時的に減少した。また ^{201}Tl の集積は、CT にて solid な部分、血管造影にて中等度の vascularity と stain の認められる部分と一致し、vascularity と cellularity に関係があると考えられた。

最近、褐色細胞腫に集積するスキャン剤として ^{131}I -MIBG が注目されているが、 ^{201}Tl も褐色細胞腫の陽性描画剤として期待される。

20. 悪性黒色腫における核医学検査の臨床的有用性

高木 善和 富口 静二 宮尾 昌幸
 七川 静人 広田 嘉久 高橋 睦正
 (熊大・放)
 金子 輝夫 (熊本市地域医療セ)

昭和 56 年 4 月より現在まで経験した悪性黒色腫 20 例に

ついて、ガリウム、肝、骨シンチによる核医学的検討を行った。術前に施行しえた 4 例のガリウムシンチでは原発巣およびリンパ節転移巣にも集積を認めず術前の Stage 決定に寄与しなかった。術後の再発例では、リンパ節転移 7 部位中 5 部位、皮膚転移巣 2 例中 1 例、肺転移 3 例中 2 例、肝転移 3 例中 3 例、骨転移 4 例中 2 例に異常集積を認めた。肝転移例は肝シンチにて 3 例全例に SOL を認め、骨シンチにて骨転移 4 例に集積を認めた。遠隔転移 6 例中結節型黒色腫が 5 例を占め、予後の悪性度を示した。

以上より、ガリウム、肝、骨シンチは悪性黒色腫の経過観察に有用と思われた。

21. 実験動物におけるモノクローナル抗 CEA 抗体による腫瘍イメージングの研究

綾部 善治 榎殿 玲子 一矢 有一
 佐々木雅之 松浦 啓一 (九大・放)
 三宅 義徳 小嶋 正治 (同・薬)

^{131}I 標識モノクローナル抗 CEA 抗体によるヌードマウス移植腫瘍(ヒト直腸原発 CEA 産生転移性肝癌)の陽性描画を行った。抗体 {抗 CEA 抗体 5B, 29B (北大西氏提供)} と正常 IgG の ^{131}I 標識は、クロラミン T 法で行った。29B 投与例と IgG 投与例では、腫瘍の陽性描画が得られたが、5B 投与例では、明らかな陽性描画は得られなかった。また描出程度は、標識抗体投与 24~96 時間後では、時間とともに明瞭となった。96 時間後にヌードマウスを脱血屠殺し、各組織の放射活性を測定した。IgG, 29B, 5B 投与例における腫瘍 (cpm/g)/血液 (cpm/g) 比は、それぞれ 0.34, 0.66, 0.12 であった。